

## 「私達の生活と言語学」

昭和50年9月21日 午後3時～4時半

発題者	橋	内	武
〃	縄	田	鉄男
主話者	神	鳥	武彦
司会	片	柳	寛

橋内（発題者）は内外言語学界の動向を紹介し、言語自体の内部機序の追求に終始したといわれる70年代の到達した眺望が、実は人間コミュニケーションの一樣態としての言語の再発見という、初原的認識への回帰を示し、また従来周縁的とされて来た社会的、文化的あるいは心理学的ないしは生態学的諸現象を焦点とする、分野の再編成が予見されることを述べた。

縄田（発題者）は民族の運命としての特定言語について、中東の言語事情を例に、そこにおける我国の外交、企業、学術の代表はじめ私人の目に余る振舞にも国内の言語的未開の延長が認められるとし、言語についての認識の蒙昧さは自国の文化のみならず他国、他民族の文化、現実の把握における致命的な欠陥と揆を一つにしており、将来は勿論、すでに現在において国際社会での正常な交流にとって著しい妨害となっていると述べ、特殊言語学の分野からの発言こそ覚醒的であって然るべしと説いた。

神鳥（主話者）は両発題者が直接間接に指摘するとおり、我が国の現実の一つの展開を待っているとまとめた。根源的な問題としても、例えば専門家の間でも国語学を言語学の一環として位置づけるという認識は未だに一般的でない。国語教育あるいは国語政策における原則の不在も、また外国語教育における混乱、外国人に対する日本語教育における無定見なども同断のことといえる。両発題者は今こそ言語学が積極的な発言を行ない寄与すべきである事を、言語学自体の課題として、また市民として我々の直面する現実的な要請であるとして説いたが、科学として自立した言語学はその蓄積と方法とを駆使し、新たに社会学的方法、認識を加えることによってその提言に一層の重さを加え、特に我国の事態の解決、改善に果すべきところ大きいと期待すると結んだ。

聴衆約30名、フロアからの応答もあり、当学会初めての企画であったが所期以上の成果があった。

（文責 片柳）